# 2021 Manchester World Cup

## 2021 年 3 月 25-28 日
## Manchester Forum

報告：JPPF 事務局、吉田寿子
写真：Mancester 大会オフィシャルカメラマン、他

### マンチェスター遠征

東京パラリンピック最終予選となるワールドカップが、WPPO( ワールドパラパワーリフティング ) 主催で 2 月～ 6 月にかけて 5 大会開催される。日本選手は、このマンチェスターと 6 月のドバイの予選会に出場して、最終の東京パラリンピック指名を狙う。世界的にコロナ感染症がまだ収まっていない中､競技会はどのように開催され、安全に参加できるのだろうか。一抹の不安を抱えながらの出発となった。

### コロナ感染症情報

「日本中の人が、こういう生活をすればコロナに感染しない、という遠征でしたね」
と、今回の遠征組の一人がつぶやいた。

今回の遠征ほど、遠征らしくない遠征は初めてだったが、このコロナ下、選手のつぶやきがどのような状況を表していたのか、報告したいと思う。

まず飛行機に乗るにあたり、出発の 72 時間前に PCR 検査をしてコロナ感染症「陰性」が証明されないと、飛行機に乗せてもらえない。72 時間前というと、検体を指定日に採取、郵送、という手順では、特に、九州や北海道に住んでいる選手にとっては、東京に検査機関がある場合、郵送に必要な日数の関係で、検査結果を出国前に出すことは難しい。それで、PCR 検査の為に出国の二日前に東京に来てもらい PCR 検査を実施した。

ロンドンに着くと、厳しい通関がある。ふつうは、到着日から 10 日間、イギリス政府の指定するホテルで隔離されるのだが、私たちは、アスリート特例措置、という書類を主催者に発行していただいていたので、隔離されることなく、通関。乗り継いでマンチェスター入りすることができた。

**コロナ禍、大会は無観客で行われた。**

コロナ下では、PCR 陰性証明書（指定証明書以外は受理されない）や、アスリート特例措置というような、「公文書」が非常に重要であることを実感した。

マンチェスターでは、空港職員がホテルまで歩いて案内、ホテルに着くや、PCR 検査室に連れていかれた。検体採取後、各自ホテルの部屋が割り当てられ、検査結果が出るまで一歩も部屋から出ないように、と、

言い渡された。
食事は、係員が部屋の前まで持ってきてくれた。今大会、ホテル全従業員、空港からホテルに案内する係官達はPCR 陰性者で、定期的に PCR 検査を受けていた。

この到着検査で、2 名の陽性者がでた。この二人と、所属の国の選手・役員全員が濃厚接触者ということで、試合の間中ホテルに閉じ込められることになった。もちろん、試合は欠場。何もせず、帰国した。まさに、水際対策。ここで、検査が実施されたことで、マンチェスター大会参加者全員が、PCR 陽性者から守られることになる。

チームのメンバーに一人でも陽性者がでると、チーム全体が試合出場停止になることを目の当たりにして、選手全員が、日ごろからコロナ感染症に対して敏感でなければならないと痛感した。特に、出国が決まったら、二週間は、人混みは絶対避けるべきで、日々、体温チェックをし、体調観察を怠ってはいけない、こちらは、次の遠征に参加しようとしている人々に、是非、伝えたいことだ。

PCR 検査陰性が証明されてからも、禁止事項だらけ。

チームメートの部屋に行くことは、厳禁。

廊下で話すことは厳禁。

喫煙所を使っても良いが即刻部屋に戻ること。

外部との接触厳禁（従って、ホテルまでウーバーイーツが配達されることは厳禁、人に買い物を頼んで持ってきてもらうことも厳禁、何らかの郵送物を受け取ることも厳禁）

この禁を破って、ホテル外の人と接触しようとした 5 名の選手が WPPO から失格を宣告された。そして、その国も失格。先のコロンビアと合わせて 7 名の選手と二つの国が、東京パラ参加権利を失った。日本チーム全体に、この情報を共有し、ホテルのルールを破ることは、即、失格になることを伝えた。

今回、トレーナーとして、土居さんに遠征に加わってもらったが、医療資格を持った人、トレーナー等の資格を持っている人だけは、選手と接触することが許可されたが、いつ、何時に、どの部屋の選手の治療に行く、ということをあらかじめ主催者に伝え、治療は最大でも 45 分と、言い渡された。

トレーニングは、各クラスごとに割り当てられ、自由な時間には、トレーニングできない。各クラスとクラスの間には、15 分間の消毒時間が設けられている。

試し検量も部屋の前の係官に申し出て、許可されたら、検量。その後 15 分間消毒時間があり、チームメイトが続いて検量することは禁止された。

ホテルの部屋を出られるのは、
＊朝、昼、夜の食事配布時のみ。食事は部屋に持ち帰って、一人で食べる。
＊トレーニングの時間、試合の日、以外の日は、部屋から一歩も出られず、部屋で、試合の模様をウェブで観戦するしかない。

ホテルの部屋は従業員の安全を考えて、掃除なし。タオルなどは、部屋の前にボンと置かれており、自分でシーツの取り換えを行う。

試合では、帯同コーチはルール上は 2 名許可されているが、今回は 1 名のみ。

検量にはコーチ等が付添えるが、今回は選手一人で対応する。

キットチェックや、検量は、選手が変わるたびに係官は、ゴム手袋を変え、消毒する。
選手は、検温して、バスに乗って、会場へ。バスの運転手も 3 日に一度 PCR 検査を受けている。乗車人数も制限が厳しく 40 人乗り位の大型バスに乗車できるのは、8 名以下。
競技会場の休憩室は、密になるということで、選手にも、審判員にも休憩室はなし。
選手は、アップが始まるまで、バスで待機。アップ場は 8 名限定。男子 59 ｋｇ級のみ、AB クラスがあったが、最初の 8 名が試合を終えて、次の選手の試合をするのは、アップ場の消毒が終わる 30 分後。つまり、同じクラスの AB は同時に検量しているのに A と、B とでは 1 時間以上時間があいて試合開始。センター補助は、ゴム手袋をはめた各国のコーチ。これは、イギリスの補助員の安全の為だと言い、万が一、選手がコロナ菌を持っていたら、補助員が危険にさらされる、という、解釈だそうだ。
色々なところで、ルールが変わっていたが、まずは、感染症防止を最優先とした試合となった。
表彰式も、メダルは、自分で首にかける、握手はしない、選手通しで肩を組んだりした記念撮影はしない。
審判員は、ゴム手袋をはめて判定をする。マスクは 6 時間おきに変える、待合室はないので、自分の役割がないときは、会場の隅で、立って待つこと。
試合を終えて、いよいよ、帰国。
マンチェスター出国 72 時間前に PCR 検査実施。陰性証明書を持って、マンチェスター、ロンドンと、乗り継いで、羽田着。
羽田に到着したら、一人も「逃さない」という威圧感で、係官が全員を集め、PCR 検査、抗原検査、アプリの入力（スマートフォンを持っていない人には、強制的に貸し出して持たせる）。ダウンロードさせられたアプリは、スカイプ、グーグルマップ、現在地報告アプリ、健康調査アプリ。
羽田で、PCR 検査の陰性が出るまで待機、バスに乗せられ、厚生労働省管轄のホテルで 3 日隔離、部屋から一歩も外に出られず。食事は部屋の前に置かれる。
3 日目に PCR 検査をして陰性であれば、バスで、羽田空港まで送ってもらい、車で自宅に戻れる人は車で帰って自己隔離。公共交通機関を使わないと帰れない人はホテルで隔離。合計二週間の隔離。この間、会社や学校に行くことも、外出することも許されない。事前に保管してきた食料を食べてしのぐ。羽田到着の翌日から数えて、二週間目の日に何も症状がなければ、15 日目から、やっと、通常の生活。
その間、現在地を報告せよというアプリのお知らせが一日に 2，3 回ランダムに来る。その都度、現在地を報告。体調を訪ねるアプリが毎日。スカイプに連絡が来て、映像で、現在地の確認と、体調の確認。これらの確認を怠ると、罰則が適用され、名前を公表される。

ともかく、出国から隔離の終わるまで 24 日間。PCR 検査陰性以外の人と一度も会わないので、コロナにかかりようがない。テレビのニュースを見ていると、密な会食や、密な買い物通り、混雑している電車。会社への出勤の映像。ともかく日常生活は、「PCR 検査が陰性か陽性かわからない」人々と生活している。コロナが収まるのは、ワクチンの普及か、国民の 70%がコロナ抗体を持つこと、と、聞いている。ともかく、マンチェスターに行って感じたことは、「PCR 検査陰性の人としか接触しない」これこそが、コロナ感染症にかからない唯一の道ではないか、と、思った。が、現実の社会で、それが、できるのか。

こういう状況を知らない人からは、こんな時期によくイギリスなどに遠征する、と、批判的な言葉も浴びせられたが、行かなければ、東京パラ代表を確保する、という、パラ・パワーリフティング連盟としての使命も果たせない。行く前は「危険を承知で」と、思っていたが、どっこい、日本における日常生活より、イギリスへの遠征の方がよほど安全であったという、とても皮肉な結果を知ることになった。

今回遠征メンバーは、皆さん、不自由や、寂しさ等があったと思うが、WPPO、あるいは、マンチェスター協会の指示をよく守り、また、隔離にも耐え、チームとして無事にマンチェスター遠征を終えられたことをメンバー一堂に感謝したい。さて、次はドバイ。遠征らしい、遠征をしたいが、まだ、コロナ禍は続くのだろう。

## マンチェスター大会結果

感染症対策を徹底した競技場内には、選手、コーチ1名、補助員5名、審判、陪審員、その他ウェブ関係者しか入れず、日本選手の写真をちょっと撮るということは許されず、マンチェスター大会の公認カメラマンの配信する写真をもらうことになった。そのため、大変、残念だが樋口選手の写真がなかったため掲載することができなかった。

連盟のジョンヘッドコーチは、車でマンチェスター入りし、日本から帯同した吉田進と共に、選手のコーチングにあたった。

中嶋明子；女子５０ｋｇ級、４位
〇52- x 55- 〇55
山本恵理；女子５５ｋｇ級、４位
x 60- 〇60- x 64
森崎可林；女子６７ｋｇ級ジュニアの部優勝
〇63- x 67- x 67

西崎哲男；男子４９ｋｇ級　２位
〇131- 〇135- 〇138
三浦浩　；男子４９ｋｇ級　４位
x 131- 〇131- x 132

市川満典；男子５４ｋｇ級、３位
ｘ 138- ○ 138- ｘ 143

男子５９ｋｇ級
光瀬智洋；５位
○ 135- ｘ 140- ○ 140
戸田雄也；６位
○ 133- ○ 137- ｘ 141

奥山一輝；男子６５ｋｇ級、３位
○ 145- ｘ 152- ｘ 152

樋口健太郎；７２ｋｇ級　失格
ｘ 165- ｘ 170- ｘ 177

中辻克仁；１０７ｋｇ級　失格
ｘ 196- ｘ 196- ｘ 196

## ダートフィッシュ＆審判の判定

WPPO は、昨年、特にコロナ禍になってから、審判教育をウェブを使って行い始めた。ID を貰って、このウェブに入ると、ルールブックそのものの勉強の時もあるが、いくつかの試技を見せて、白とか、赤とか、もし、赤だとすると理由は何かと、問い、回答？を示す。（？としたのは、色々な角度から見る判定に確たる答えがあるか疑問を持っているから）そして、審判の赤の判定の理由をなるべくばらけないように教育しようとしている。その効果か、割と、判定の理由は一致していた。

現在の審判試験は、昔のようにパラパワーの経験者が一堂に会して、試験をするというのではなく、WPPO のウェブ上で試験を行っている。従って、英語ができれば、少し勉強すれば、レベル３（IPC 公認国内審判員）資格を取ることができる。これが、私は、大問題だと思っている。たとえば、先の全日本の時には、中ノ瀬氏、中元氏、阿南氏、川合氏を審判に起用したが、WPPO から組織員会に所属している人がレベル３を取ったので、全日本で審判をさせよ、と、命令が来たが、丁重にお断りした。パラパワーをルールブック上だけで理解し、実際に見たこともない、パラ・パワーリフティングの判定をするというのは、一生懸命練習してきた選手に対して、大変、失礼であり、全日本の大会が一定のレベルを保つことは難しくなる。今後も、WPPO からこのような要請が来ると思われるが、まずは、連盟に審判員として登録し、いくつかの競技会を経験し、その後に、WPPO の要請に応じようと思う、と、連絡を入れて、「素人」審判員を起用することをあきらめてもらった。

さて、その中で、中辻選手の試技。

中辻選手は、バーを受けたとき、筋肉の痙攣（？）様のものがおこった。陪審席にいた私は、試技そのものは完璧だと思ったので、白と判定した。ところが、審判の判定は、下記の通りで、みんなバラバラ。失敗の理由が全部ついていた。これは、まだ、経歴２年くらいの審判たちが見たことがない現象であったためと思う。健常者を含め、私は審判員として４０年くらい、皆さんの試技を見てきている。その中で、特に健常者のデッドリフト、パラパワーの重量級の選手の筋肉が時々、ガタガタと痙攣様の症状が出ることがある。デッドリフトを全身ガタガタと痙攣しながらも引ききったという試技を見たことがあるという方々は多いと思う。この点は、今、医学的になんと説明すればよいか、ドクターに聞いている。この結果を WPPO と WPPO の審判長にレポートとして提出し、限界の力を出す時には、このような現象が起こることがあるが、これは、失敗の原因ではない、と、訴えたいと思っている。ジョンコーチからは、三試技目に、抗議が入ったが、三試技目は、胸の止があいまいだったので、私も赤を押していたので、抗議は却下された。できれば、第一試技で、抗議を出してほしかったと、個人的には思っている。今後も中辻さんの練習を慎重に見ていき、不本意な赤がつかないよう、WPPO に訴えていこうと考えている。

ダートフィッシュという機能を使って、すべての試技の映像と、審判の判定が撮られているので、合宿ごとに各選手の試技を反省し、ドバイでのランキング上昇を目指したい。今回の日本チームの試技成功率は、42%であった。ドバイでは、これを 50%以上とし、より、ランキングを上げ、一人でも多く東京パラ入りを果たしてもらいたい。